

(シンポジウム「看護を実現する人間関係の成立と発展」)生命の危機的状況の看護における人間関係の構築

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 城戸, 沙織 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.20780/00032076

東京女子医科大学看護学会第 13 回学術集会 シンポジウム
「看護を実現する人間関係の成立と発展」

生命の危機的状況の看護における人間関係の構築

城戸 沙織 (東京女子医科大学病院 看護師)

クリティカルケアを受ける患者は、呼吸不全や循環不全といった生命の危機に直結する病態を呈する。治療が奏功するかどうかは、患者の病状の重症度や進行度によって左右される。初期治療の目標は生命の維持にあり、時間的な猶予がないまま家族には意思決定を求める事となる。突然の出来事に対して家族は何の準備もないまま、想像をしなかった状況への対応に迫られる。これまで、面会時に衝撃のあまりに呆然と立ちつくしたり、声を発せず医療者の方をちらちらと見たり、大切な人の変わり果てた姿に涙し、動悸や失神などの急性身体反応が出現する家族をみてきた。患者の生命の危機は、家族にとってすぐには受け止める事の出来ない事態であり、動転、混乱等の心理的危機を生みやすい。家族との関係性を築く事は看護において必要ではあるが、家族がパニックに陥っていることもある為、人間関係の確立が困難なまま治療が進められていくことも多い。クリティカルケア看護では、患者ケアと同時進行で家族ケアに当たろうとしているが、実際は患者ケアを遂行する事で手一杯な事が多く、時間的余裕もない。さらに家族との関係性の構築が困難な要因のひとつとして、看護師が予断を許さない患者の病態や不透明な予後といったものを察知しており、自らが発する一言の重みを過剰に認識している事が挙げられる。

私は 20 年間、クリティカルケアに携わってきた。患者ケアと同時進行で家族との関係性を形成する事は簡単ではなく、それだけに明確な目的をもって関わる必要があると実感している。私がどの局面においても実践してきた事は、「家族に近づく」という事である。それは、危機的状況にある家族のそばに身を置き、情動の変化に寄り添い、「気遣い、心配している」事を言葉で伝えながら、「一緒に物事を考える」事を重点に置いた看護である。家族のそばに身を置くという事は、感情や思いの表出を促すだけでなく、家族との対話に溶け込んでいく事を可能にする。積極的に対話に入っていく事で、家族の抱える問題点やニーズを把握するきっかけとなる。このような看護師としてのあり方やかわり方は、ベッドサイドにいるからこそ、実践が可能であり、家族との関係性の構築に大きな影響を与えていたと振り返っている。

さらに、時には踏み込んで対話をする事も必要であると考え。家族の心理状態は患者の容態に影響を受けるとされており、家族の心理状態により病状の受け止め方も変化していく。簡単な質問を行いながら、感情の求めに応じ、じっくり時間をかけて話をするなかで、関係性が発展していく事も経験を通して学んできた。

今回は、いくつかの事例を振り返ることを通して、どのような看護が関係性の構築につながるのか、また、関係性が構築できなかったケースからは、どのような看護を実践していく必要があるのか、特に家族との関係性の構築に焦点をあて、考える機会としたい。